

## 白居易「秦中吟」の読者層：「新楽府」との比較を通して

静永, 健  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9676>

---

出版情報：中国文学論集. 23, pp. 41-58, 1994-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 白居易「秦中吟」の読者層

——「新樂府」との比較を通じて

静 永 健

## 序

殘燈無焰影憧憧

殘灯 焰無く 影憧憧

此夕聞君謫九江

此の夕 君が九江に謫せらるるを聞く

垂死病中驚起坐

垂死の病中 驚きて起坐すれば

闇風吹面入寒窗

闇風 面を吹きて寒窓より入る

この詩は、元和十年（八一五）白居易の江州司馬左遷の報に接し、通州司馬にあって病篤き元稹が、特に寄せた七言絶句である<sup>1</sup>。また、私達にとつては、目加田誠先生が、生前そのご病床にあつての歌集の題名とされたことにおいて、記憶に新たなるところである。消えかからんとする夜灯の枕辺に親友の悲報を耳にし、驚いて病軀を起す元稹。その頰に冷たい夜風が吹き抜けてゆく。この詩は、極めて暗示的な叙景描写によつて、作者の驚きと悲しみとを見事に詠み出だした絶品であり、私達は、この一首から元白の厚い交情を窺い知ることができるのである。しかし、白居易は、この詩を元稹への返信に引用し、次のような言葉を述べている。「此の句 他人すら尚ほ聞くべからず、況や僕が心をや。今に至るまで吟ずる毎に、猶ほ惻惻たり耳<sup>3</sup>。」と。すなわち、この詩は、餘人をして聞くに堪えない気持ちにさせるが、まして我が心には、今なお惻惻たる悲痛な感傷が起ころうというのである。今日、

白居易「秦中吟」の読者層（静永）

私達は、元白の交情の深さを、これらの詩文を読んで、主にその修辭の巧みさによって推察する他は無い。だが、当事者である彼らにとって、その思いは、度重なる左遷や病氣、更には過去の様々な思い出が錯綜し、まさに餘人には量り知れないものとなっていたであろう。このことを思うとき、千年以上も後世の私は、両者の交情のひだに入りきれない一種のもどかしさを禁じ得ない。もとより、みずからの読解力の浅さの所為であるとしても。

ところで、ここには古典詩歌鑑賞における一つの忽視できない問題が提出されていよう。すなわち、詩歌における読者および読者層の問題である。その作品が、何時、誰に向けて詠まれたものかを知ることが、詩の解釈の重要な一部分であり、特にこれは、杜甫や白居易のように、多く自己の現在的情況に密着して創作が行なわれる詩人においては、殆ど必須のものとと言えるのである。

一

さて、「秦中吟十首」(卷二・0075~0084)と「新樂府五十首并序」(卷三~四・0124~0174)とが、白居易の「諷諭詩」の代表作であることは、今日すでに贅言を要しない。これら二つの作品群は、その量の豊富さ、また風刺の内容の痛烈さにおいて、まさに堂々の風格を持つものである。しかし、これら二作品群は、白居易が生存していた、その当初の評価、すなわち、白居易自身の言及、および元稹ら周囲の友人達の言動を見るに、それらは必ずしも同日には論じられていない。結果から先に言えば、その言及は、専ら「秦中吟」に重く、「新樂府」に軽い、ものの様ように見受けられるのである。例えば、

- ①「唐衢を傷む二首」其二(卷一・0035)に「憶ふ昨元和の初、諫官の位に備ふるを忝くす。是の時 兵革の後、生民 正に憔悴せり。但ら民の病痛を傷み、時の忌諱を識らず。遂に秦中吟を作り、一吟に一事を悲しむ。貴人は皆怪怒し、閑人も亦た非訾す。天高く未だ聞くに及ばざるに、荆棘 滿地に生ず。唯だ唐衢の見る有り、我が平生の志を知る。一読歎嗟を興こし、再吟涕泗垂る。因りて和す 三十韻、手づから題して遠く緘寄す。吾を陳杜の間に致し、賞愛すること常の意に非ず……。」

②「元九に与ふる書」(卷二八・1186)に、白居易がみずからの諷諭詩の評判を述べ、その「賀雨詩」「哭孔戡詩」「樂遊園」「宿紫閣村詩」とともに、「秦中吟を聞けば、則ち権豪貴近の者、相目して色を変ぜり矣。」

③同じく「与元九書」に、「又昨漢南に過れる日、適ま主人の衆樂を集め、他賓を娛しましむるに遇ふに、諸妓 僕の来たれるを見、指さして相顧み『此れ是れ秦中吟・長恨歌の主なり耳』と曰ふ。」

以上は、「秦中吟」について白居易がみずから遭遇し、かつ耳にした評判である。また、彼の親友元稹は、

④元稹「白氏長慶集序」に「因りて賀雨・秦中吟等数十章を為り、天下の事を指言す。時人之れを風騷に比せり焉。」(中略)「而して樂天の秦中吟・賀雨の諷諭等の篇は、時人に能く知る者罕なり。」と述べ、「秦中吟」をその代表作として挙げるも、「新樂府」への言及は無い。

一方、「新樂府」については、先掲「与元九書」の、彼の詩集の分類を述べる部分において、

⑤「拾遺より来、凡そ適ふ所 感ずる所の、美刺興比に関する者、又 武徳より元和に訖るまで、事に因りて題を立て、題して新樂府と為せる者、共に一百五十首、之れを諷諭詩と謂ふ。」

とあるほか、

⑥「拙詩を編集して二十五卷と成し、因りて卷末に題し、戯れに元九・李二十に贈る」(卷一六・1106)の第四句「苦ろに短李をして歌行に伏せしむ」の句下の自注に「李二十、常に歌行に自負せしも、近ごろ予の樂府五十首を見、黙然として心伏す。」

とあるのみである。しかるに、この⑥に挙げた詩の冒頭の二句には、

⑦「一篇の長恨 風情有り、十首の秦吟 正声に近し。」

とあって、やはり「秦中吟」は「新樂府」よりも重要視されていたものようである。また、白居易が自作の「樂府」について言及している箇所が、この他に二例あるが、

⑧「唐生に寄す」(卷一・0033)に、「我も亦た君の徒、鬱鬱 何の為す所ぞ。声哭を発する能はず、転じて樂府詩を作る。篇篇 空文無く、句句 必ず規を尽くす。功は眞人の箴よりも高く、痛は騷人の辞よりも甚だし。宮律の高きを求むるに非ず、文字の奇なるを務めず。惟だ生民の病を歌ひ、天子の知を得んことを願ふも、未だ

天子の知を得ず、甘んじて時人の嗤を受く。薬の良きは気味苦く、琴の淡きは音声稀なり。権豪の怒を懼れず、亦た親朋の讒に任す。人は竟に奈何ともする無く、呼びて狂男児と作せり。群動の息むに逢ひ、或は雲霧の披くに遇ふ毎に、但ら自ら高声に歌ひ、天の卑に聴するを庶幾ふ。歌と哭とは名を異にすと雖も、感ずる所は則ち婦を同じふす。君に寄す三十章、君に与ひては哭詞と為らん。」

⑨「陶潜の体に効ふ詩十六首」其六（巻五・2218）に、「我に樂府詩有り、成りて来人未だ聞かず。今宵酔ひて興有り、狂詠四隣を驚かす。独賞猶ほ復た爾り、何ぞ況や交親有らん。」

これらが果たして「新樂府五十首」そのものを指すものであるかどうか、文脈上確定はできない。筆者が窃かに案ずるに、ここでは「新樂府」「秦中吟」を含む彼の「諷諭詩」全てを指すと考えてよいのではなからうか。

以上、白居易の諷諭詩については、唐衢が「賞愛」し、旅先の妓女までが「指さす」ほどに、その「秦中吟」が評判を得ているのに対し、「新樂府」への言及は極めて稀である。これはいったい如何なる理由によるものであらうか。『白氏文集』の第三・四巻を占め、五十首もの大作である「新樂府」が冷遇され、一方、僅か十首の「秦中吟」が、特に⑥のように「正声に近し」として「長恨歌」と共に詩の冒頭に列せられ、また④のように元稹によって、その序文にまで紹介されるに至った経緯には、「秦中吟」また「新樂府」制作の動機に何か特別な事情が存在するように思われるのである。

ところで、ここで一言「新樂府」「秦中吟」両作品群の制作時期について触れておきたい。

まず「新樂府五十首」については、先行研究において既に様々な推論がなされているが、基本として、その「序」に「元和四年、左拾遺為りし時の作。」という一文が添えられていることは揺るがし難い。私は、更に其三「杜陵叟」詩の内容より、元和四年（八〇九）秋冬の完成を最も妥当と考える。一方、「秦中吟十首」については、清・汪立名が撰した『白香山年譜』がこれを元和五年（八一〇）に繫年し、これが一応の定説となっていたが、近年、羅聯添氏によって更に元和四年十一月から翌五年四月までの間との考証が提出された。本稿では、紙幅の都合により羅氏の考証を詳述できないが、この説に賛同するものである。してみると、この「新樂府五十首」と「秦中吟十首」とは、白居易がほぼ同じ時期に発表した作品ということになる。五十首と十首、七言歌行と五言古詩という数

量・詩型に違いがある作品群を、彼は何故同時に世に問おうとしたのであろうか。しかも、上述の如く、その当初の伝播状況には明らかに格差があった。私達は、これを如何に解すればよいのであろうか。本稿は、この問題について、主に「秦中吟」を読み解くことよつて一つの試論を呈したいと思う。

二

さて、「秦中吟十首」とは、そも如何なる性格を持つ作品群であるのか。まず、その第一首によつて考えたい。

〔其一〕議婚

婚を議す

|       |       |               |              |
|-------|-------|---------------|--------------|
| 天下無正聲 | 悦耳即爲娛 | 天下に正声無し       | 耳を悦ばすを即ち娛と爲す |
| 人間無正色 | 悦目即爲姝 | 人間に正色無し       | 目を悦ばすを即ち姝と爲す |
| 顔色非相遠 | 貧富則有殊 | 顔色 相遠きに非ざるに   | 貧富 則ち殊なる有り   |
| 貧爲時所棄 | 富爲時所趨 | 貧なれば時の棄つる所と爲り | 富なれば時の趨る所と爲る |
| 紅樓富家女 | 金縷繡羅襦 | 紅樓 富家の女は      | 金縷もて羅襦に繡す    |
| 見人不斂手 | 嬌癡二八初 | 人に見ふも斂手せず     | 嬌痴 二八の初め     |
| 母兄未開口 | 已嫁不須臾 | 母兄 未だ口を開かざるに  | 已に嫁すこと須臾ならず  |
| 綠窗貧家女 | 寂寞二十餘 | 綠窓 貧家の女は      | 寂寞たる二十餘      |
| 荆釵不直錢 | 衣上無眞珠 | 荆釵 錢に直せず      | 衣上に眞珠も無し     |
| 幾迴人欲聘 | 臨日又踟躕 | 幾回か 人聘せんと欲するも | 日に臨みて 又踟躕す   |
| 主人會良媒 | 置酒滿玉壺 | 主人 良媒を會せしめ    | 置酒 玉壺に滿たしむ   |
| 四座且勿飲 | 聽我歌兩途 | 四座 且らく飲む勿れ    | 我が兩途を歌ふを聽け   |
| 富家女易嫁 | 嫁早輕其夫 | 富家の女は嫁し易きも    | 嫁早ければ其の夫を輕んず |
| 貧家女難嫁 | 嫁晚孝於姑 | 貧家の女は嫁し難きも    | 嫁晚ければ姑に孝ならん  |

白居易「秦中吟」の読者層（静永）

聞君欲娶婦 娶婦意如何 聞く 君 婦を娶らんと欲すと 婦を娶るに意は如何

天下にはこれぞ衆人が聴くべき正統な音楽というものは無く、各々その人の愛好があるように、世の女性もさまざま。しかし、その家の貧富が結婚を左右する。富家の娘は、衣装も上等で、まだ礼儀知らずの十六歳でまたたく間に嫁ぐのに対し、貧家の娘は、みすぼらしく、二十を過ぎてても片付かない。何回か縁組があつても、すぐ破談。さて、この家の主人は、息子の婚礼に良い仲人を喚び、お酒も十分調わせた。そこで、それがしも一言。富家の娘は嫁ぎ易いが、すぐに夫を軽んじます。貧家の娘は嫁ぎ難いが、姑には孝行だ。新郎君、君はどちらを選びますか？

この詩は、結婚についての論。本邦においても、つとに『源氏物語』「帚木」の「雨夜の品定め」の段にも引用されて有名である。ところで、従来この詩の後半部は、息子の縁談に貧富いずれの家から嫁を貰うかを協議している風景に解釈される。しかし、筆者はこれを婚儀の披露宴の席上の情景と解したい。貧富双方より縁談があつて、わざわざ富家を抑えて貧家との縁組を望むというのは、社会通念上不自然であるし、主人が「良媒を会」せしめた理由は（媒酌人がいるというのだから既にこれは結婚披露宴ではないか）、おそらく本日の新婦こそが、二十歳を過ぎた言わば〈縁遠き〉貧家の女性であつたからではなからうか。白居易のこの論は、かかる婚礼に出席しての所謂へ友人代表のスピーチと解する方が、より自然なように思われるのである。しばらく諸方の批評を俟つ。

さて、ここで問題となるのは、作者白居易の作詩態度、すなわちその詠出の視点である。白居易は、先にこの「秦中吟」に簡単な序文を付し、「貞元・元和の際、予長安に在り。聞見の間に、悲しむに足る者有らば、因りて其の事を直歌し、命じて秦中吟と為す。」と言っている。白居易が初めて長安に上つたのは貞元十五年（七九九）。以来この元和四年あるいは五年（八一〇）までの間に彼が経験した様々の「悲しむに足る者」を「直歌」したのがこの「秦中吟」である。この「議婚」詩を見るに、それは友人の婚礼という極めて個人的な経験を題材としている。これは「新樂府」の序文が「総じて之れを言はば、君の為、臣の為、民の為、物の為、事の為に作り、文の為にして作らざるなり。」と言ひ、その五十首が「七德舞」という天子の樂舞を詠じた詩より始まるのと好対照をなすものである。公的な「新樂府」と私的な「秦中吟」という対比は、両作品群の最も際立った違いとして指摘され

るのではなからうか。

「秦中吟」の私的性情を見る上で、次に注目すべき点は、その作品中に登場する人物にある。先の「議婚」詩もそうであったように、それらは、今日の我々には推定すべくもない白居易の周囲の、歴史上に全く無名の人物であった。かつ、次の詩に見える人々はどうか。

〔其四〕傷友

友を傷む

陋巷孤寒士 出門苦恓恓

陋巷 孤寒の士 門を出でて苦だ恓恓たり

雖云志氣在 豈免顔色低

志氣在りと云ふと雖も 豈に顔色の低るるを免かれんや

平生同門友 通籍在金閨

平生 同門の友 通籍 金閨に在り

曩者膠漆契 邇來雲雨睽

曩者 膠漆の契 邇來 雲雨の睽

正逢下朝歸 軒騎五門西

正に逢ふ 朝を下りての歸り 軒騎 五門の西

是時天久陰 三日雨淒淒

是の時 天久しく陰り 三日 雨ふること淒淒たり

蹇驢避路立 肥馬當風嘶

蹇驢 路を避けて立ち 肥馬 風に当たりて嘶く

迴頭忘相識 占道上沙堤

頭を回らずも相識を忘れ 道を占め 沙堤に上る

昔年洛陽社 貧賤相提携

昔年 洛陽の社 貧賤 相提携せしも

今日長安道 對面隔雲泥

今日 長安の道 對面 雲泥を隔つ

近日多如此 非君獨慘悽

近日 多く此くの如し 君のみ独り慘悽たるに非ず

死生不變者 唯聞任與黎

死生不變の者 唯だ任と黎とを聞くのみ

長安は名利の地、多くのサクセス・ストーリーを生む都である。しかし、それは同時に幾多の敗残者を生むことにも繋がっている。かかる不遇の才子は、旧友にも見棄てられ、すなわち「陋巷の孤寒の士」として哀れな末路を辿るしかない。白居易の詩文には、張籍、孔戡、劉敦質といった、こうした時運に見離された有為の士がしばしば登場する。また、盛唐の詩人杜甫も詠じている、「手を翻せば雲と作り 覆せば雨と作る」（「貧交行」…仇注卷二）と。この詩は、当時不遇の憂き目にあってゐる白居易の友人をモデルとし、杜甫の詩を翻案して作られたものであ

白居易「秦中吟」の読者層（静永）



る。ところで、かような時世にあつて、なおも「死生不変」の契りを守った二人がいる。すなわち本詩の最終句にいう「任と黎」という人物である。宋本は、この句下に「任公叔、黎逢」という二人の実名を注記する。この二人は、新旧『唐書』等、正式な記録には見えない。ただ、『全唐文』巻四五九に任公叔の「通天臺賦」（『文苑英華』巻五〇にも収載）「登姑蘇臺賦」（『文苑英華』巻五二にも）の二作と、同巻四八一に黎逢の「通天臺賦」（『文苑英華』巻五〇にも）等賦九首が残されており、その「通天臺賦」を科擧の題とする大曆十二年（七七七）の〈同年〉の進士であることがわかる。また、この他、黎逢について、彼の逸話が『唐摭言』巻五・『唐詩紀事』巻三六にあり、詩二首（『全唐詩』巻二八八、ただし内一首は一説に張聿作）と、更に建中元年（七八〇）経学優深科の及第（『冊府元龜』巻六四五・『唐会要』巻七六）の事実が伝わっているが、二人の「死生不変」の交友を証拠づけるものは何一つ残されていない。白居易がこの二人を顕彰するのは、今日の私達よりすれば些か奇異な感を覚えるものである。

だが、このことは「秦中吟」の読者層を考える上で重要な示唆を与えてくれる。つまり、この詩は任公叔・黎逢という単なる三十年前の進士の事績を知る者、すなわち当時長安にあつて科擧を通じて官吏となり得た者（白居易もその一人である）、および陋巷の破窓に未来の栄光を夢見る者達であつて、本来、広く一般民衆に示したり、天子に奏聞することを第一の目的とはしていなかったのではないかということが推測されるのである。

また、次の一首はどうであろうか。

〔其六〕立碑

碑を立つ

勲德既下衰 文章亦陵夷

勲德 既に下衰し 文章も亦た陵夷す

但見山中石 立作路傍碑

但だ山中の石に見えしも 立ちて路傍の碑と作す

銘勲悉太公 叙德皆仲尼

銘勲 悉く太公 叙德 皆 仲尼

復以多爲貴 千言直萬貲

復た多きを以て貴と爲し 千言 直 万貲

爲文彼何人 想見下筆時

文を爲る 彼 何人ぞ 想ひ見る 筆を下せる時

但欲愚者悅 不思賢者嗤

但に愚者の悦を欲し 賢者の嗤を思はず

豈獨賢者嗤 仍傳後代疑 豈に独り賢者の嗤のみならんや 仍に伝ふ 後代の疑

古石蒼苔字 安知是愧詞 古石 蒼苔の字 安ぞ知らん 是れ愧詞なるを

我聞望江縣 麴令無惇嫠 我聞く 望江縣 麴令 惇嫠を撫すと

在官有仁政 名不聞京師 官に在りて仁政有るも 名は京師に聞こえず

身歿欲歸葬 百姓遮路岐 身歿して帰葬を欲せば 百姓 路岐に遮る

攀轅不得歸 留葬此江湄 轅に攀ぢて歸るを得ざれば 留めて此の江湄に葬る

至今道其名 男女涕皆垂 今に至るまで其の名を道はば 男女 涕 皆垂る

無人立碑碣 唯有邑人知 人の碑碣を立つる無く 唯だ邑人の知る有るのみ

『資治通鑑』唐紀五三、憲宗の元和四年の条には、この時、宦官として宮中で最大の権力を振う吐突承璀が、功德使として安国寺を修復し、玄宗の華嶽碑と同じ大きさの聖德碑を建てようとしたが、翰林学士李絳の反対に会い、天子の命によって建築中の碑楼を百頭の牛でもって曳き倒された記事が見える。この詩は、都長安に氾濫したかかる立碑の風潮を諷諭し、それとは対照的に望江縣（今の安徽省の一小県）の県令として仁政を施した人物の事績を紹介するものである。宋本は、この詩の第十八句の下に「麴令、名は信陵」と注する。麴信陵の伝は、『唐詩紀事』卷三五および『唐才子傳』卷五等に存するが、貞元元年（七八五）の進士で、同六年に舒州望江縣の県令となつたほかはあまりよくわからない人物である。

白居易は、何故このような人物を詠じたのであろうか。また、如何にして彼の事績を知り得たのであろうか。これは些か愚問に属しようが、ここに一つの手懸りがある。それは、清・徐松の撰した『登科記考』である。同書に拠れば、貞元元年に彼と共に進士に及第した人物は、状元及第の鄭全濟のほか、羊士諤、陸灝、姚係、盧汀、錢徽、崔從、崔頰の七人の名が見える。この錢徽という人物こそは、大曆の詩人錢起の子であり（字は蔚章）、また白居易とはこの当時翰林院の同僚として多くの詩を酬唱し合った仲間である。また盧汀（字は雲夫）についても、例えば白居易に「和錢員外答盧員外早春遊曲江見寄長句」（卷十二・0585）という作品があり、かつこの詩の宋本自注には「雲夫・蔚章は同年及第、時に予は蔚章と共に翰林に在り。」とある。こうして見てくると、ここに白居易

と麴信陵とを結び見えない糸のあることが判明し、同時にかかる無名の士を詠じた理由には、これら「秦中吟」の読者が、錢徽等、当時白居易の周圉に存在した友人達であったのではないかということ、隴氣ながらも確実に推定させてくれるのである。

ところで、ここで更に「仁政」とされた麴信陵の「惇嫠を撫す」という事績に注目したい。というのは、この「立碑」詩が詠まれたと思われる元和四年頃の白居易の周圉を考えると、「惇」つまり妻を亡くした男達が存在するのである。すなわち元和四年七月九日、元稹は愛妻韋叢を亡くす。彼の悲しみは、やがてその「傷悼詩」の諸篇となつて文学的結末を見るが、元稹の事件とこの「立碑」詩には何らかの繋がりはないであろうか。また、同年九月、盧貞（字は子蒙）という人物も妻を亡くし、彼を慰めるべく、元稹が数首の詩を贈っている。そして、同じく九月十九日、こんどは韋叢の父、韋夏卿の継妻段氏が亡くなり、元稹は彼女の為に墓誌銘を書いている。韋夏卿は先に元和元年に歿している。すなわち、一人の「嫠」（寡婦）の死である。これらの事実と麴信陵の「仁政」とは、別して直接的な関係があるわけではないが、「惇嫠を撫す」ということが、ここで特に「仁政」として詠み出だされる背景には、白居易の無二の親友元稹のかかる不幸が想起されているようにも思われる。

以上かなり詮索に過ぎたかも知れぬが、「秦中吟」は、その詠出された題材、および作者白居易の視点において、当時長安に在住する進士出身者しか知り得ない人物が登場する等、その私的人格を多分に持つものであるということが言えるように筆者には思われる。それらは、錢徽や元稹といった白居易の周圉の人々を第一の読者として想定し詠み出だされたものではなかつたらうか。其二「重賦」、其三「傷宅」、其八「五絃」、其十「買花」等、それらはいかにも当時長安にあって社会的に問題となつてゐることを諷諭しているかのようでもあるが、また其五「不致仕」、其七「輕肥」、其九「歌舞」のように、ある面では、未だ下積みの小官の、権責を誇る大官達に対する不満と羨望の辞とも解せられるものも一方において確にかつ多分に含まれてゐるのである。

さきに②として挙げたように、白居易はその「秦中吟」の評判について「権豪貴近の者達が読んで顔色を変えた」と言っている。然り、「秦中吟十首」において、各首に頻繁に見えるのは、その権貴富豪の者達への痛罵である。例えば、其一「議婚」には「貧富 則ち殊なる有り」とあり、其二「重賦」においては、「官庫の門を窺」った農民の見たものは「繪帛は山の如く積まれ、絲絮は雲の似く屯む」であり、其三「傷宅」には「厨に臭敗の肉有り、庫に貫朽の銭有」る大邸宅の様子が描かれ、其四「傷友」では「通籍 金閨に在」るかつての友人の薄情が、其五「不致仕」では「朝露に名利を貪り、夕陽に子孫を憂ふ」老大臣の醜態が詠まれている。また其六「立碑」では「復た多きを以て貴と為し、千言直万貫」とあり、其七「輕肥」は輕裘肥馬の内臣(宦官)の「意氣驕 路に満ち、鞍馬 光塵を照らす」様子が、其九「歌舞」は「朱輪 車馬の客、紅燭 歌舞の樓」の飲樂が、其十「買花」は「一叢 深色の花、十戸 中人の賦」という高価な牡丹の花がそれぞれ詠じられている。そして其八「五絃」は、一見「富貴」とは無関係のようだが、一世を風靡する趙璧の五絃琵琶に、「今を好み古を好ま」ざる風潮によって「所以に緑窓の琴、日日 塵土を生ずる」という情景を見る目は、やはり他の九首と軌を一にするものと考えてよいであろう。かくして、其九「歌舞」の第五・六句に曰く、

貴有風雲興 貴には風雲の興有り

富無飢寒憂 富には飢寒の憂無し

この「富貴」に対する攻撃的な眼光は、「秦中吟十首」全篇に一貫する白居易の視点と言え、まさにこの一聯には「秦中吟十首」の主題が要約されていると思われるのである。

さて「秦中吟」をこのように読み解いてゆくと、私達はおのずと「新樂府」との違いに気付かされよう。もちろん「新樂府五十首」にも其三二「売炭翁」や其四一「官牛」のような権貴の横暴を詠む作品はある。だが、五十首は総じてその攻撃性に弱く、そこには往々にして天子の視点とでも言うべき、つまりは「秦中吟」とは対照的な公的な性格が窺われるのである。例えば、其二八「牡丹芳」は、「秦中吟」の「買花」詩と同じ題材を扱うものだが、

白居易「秦中吟」の読者層(静永)

白居易はこの詩の主題を「天子の豊を憂ふを美むるなり」と自注し、また「傷友」詩に対応する其二七「澗底松」には「天子の明堂に梁木を欠く、此に求め、彼に有るも、両つながら知らず」の句がある。また其十七「五絃弾」について見るに、趙璧の琵琶によって遺棄せられる楽器は「秦中吟」の「五絃」詩に詠じられた「緑窓の琴」ではなく、「二十五絃」の「古瑟」であり、この異同は、一方が一般の士大夫を、他方が天子の楽団（教坊）をそれぞれ念頭に置いていることに由来するのではなからうか。かつ、其十五「道州民」は、さきに挙げた「立碑」詩の後半部に酷似するが、そこに顕彰される人物は、麴信陵のような微官ではなく、先帝順宗がかつて都に召還せんとして果たせなかつた、道州刺史陽城という名士である。こうして見てくると、私的な「秦中吟」に対して、「新樂府五十首」には天子への奏聞を意識しての、題材選択に際しての細やかな配慮が看取されるのである。また、「富貴」という語句に着目すれば、「新樂府五十首」中には、「秦中吟」に見られたような、これを敵視する用例は全く無い。ただ一例、其四四「草茫茫」に、

別爲天地於其間 別に天地を其の間まに爲り

擬將富貴隨身去 富貴を將もて身に随もつて去かかんと擬す

とあるが、これは死後の世界に「富貴」を持ってゆこうとした秦始皇の虚妄を嘲る句である。富貴は天に在り。天子とは言わば「富貴」の具現者であり、ある意味では「富貴」そのものでさえある。されば、その天子に奏聞すべく作られた「新樂府」には、その言葉は全く意味を成さなかつたと言えるのではなからうか。

#### 四

公的性格の「新樂府」と、私的性格の「秦中吟」。かかる両者の対照を考えると、私達ははじめて白居易がこの元和四年から五年にかけての時期に、これら性格の相異なる二つの作品群を発表した理由が了解される。そして、唐衢が感動し、漢南の妓女が噂し、元稹が白居易の文集の序文に紹介したのが、「新樂府」ではなく、この「秦中吟」であつたことも、「富貴」を敵視する一般士大夫と庶民の視点からの詠作であることによつて説明付けられる

であろう。白居易は、誰に読ませる作品であるかを常に意識しながらその創作活動を展開していたのである。

ところで、この時期、白居易は左拾遺という官職にあつて、実に意気洋洋としていた。それらは、新旧『唐書』の白居易伝や、『資治通鑑』の記述等における彼の活躍に瞭然としている。時には彼は、皇帝憲宗に向かつて「陛下錯てり。」と暴言を吐くほどに盛んであつたのである。またこの元和四年には、妻楊氏との間に初めての子供を授かるが、その娘の名を、彼は自己の職場である金鑾殿に因み、大胆にも「金鑾」と名付けるのであつた。世情はなお不穏ではあつたが、彼には実に幸福なひとときであつたのである。彼のこの勢力的な創作活動の背景には、こうした身辺の事情も考え合わせようか。

さて、以上のような考察を経て、更に考えられることが一つある。それは、この中唐期に隆盛を見る社会風刺の作品群である。従来の文学史において、これらは既に下降期にあつた唐王朝の社会情勢から説き起こされるのが一般であつた。しかし、この「秦中吟」の創作過程を推察するに、白居易の周辺にはある特定の読者層が形成されていたように思われる。すなわち「讒婚」や「傷友」、そして「立碑」の各詩を見るに、それらは必ずしも最初から広範な不特定の読者を想定して詠出されたとは考えられない。つまり、本稿にいう〈私的性格〉を備えているように思われるのである。それらの詩は、任公叔や黎逢、望江県令として不遇の生涯を終えた麴信陵という人物を知る者達であり、また、貧家の娘を娶らざるを得ない中流以下の士大夫達であつたと考えられるのである。もちろん、作者白居易にしてみれば、将来広範な読者を得、天下にその詩が喧伝されることは窃かに望むところであつたであらう。しかし、一方でその左拾遺という地位を十分に發揮し、天子の閲読に叶うべき「新樂府」を彼は用意していたのである。白居易のこの「秦中吟」という十首の詩は、やはりその当初、元稹や錢徽、そして唐衢といった彼の親しい友人達、すなわち当時長安にあつて彼が相識となつた中流かつそれ以下の士大夫達のために、彼の衷心からの同情を以て詠み出だされたと考えるのが至当であると思われる。しかも、彼の詩を目にした友人達も、白居易と同様に社会を憂える詩篇を詠んでいる。元稹がそうであり、李紳が、そして張籍がそうである。かつ、特にここで思い起こされたいのは、さきに①に挙げたように、唐衢が白居易のこの「秦中吟」に和して三十韻の詩を寄せ、白居易を「陳杜の間に致し、賞愛すること常の意に非ず」であつたことである。また、白居易自身もその後元稹の詩

に対し「和答詩十首并序」(卷二・0100~0110)を、張籍に対し「読張籍古楽府詩」(卷一・0002)を、そして錢徽に対し「白牡丹詩、和錢学士作」(卷一・0031)を詠み、これらをみずからの「諷諭詩」に編入させているのである。中唐期にあって白居易を中心に盛んに創作されたこれら社会風刺の詩篇の多くは、かかる詩人間の相互の私的な関係において創作され読まれていたとは言い得ないであろうか。

当時、科挙及第によってしかその栄達を望むべくもなかった白居易等中流以下の士大夫達は、概して孤独であった。白居易は長安上京の直後の書簡の中に言っている。

居易は鄙人なり。上に朝廷附離の援無く、次に郷曲吹煦の誉無し、然れば則ち孰か為にして来たらん哉。蓋し仗む所の者は文章のみ耳、望む所の者は主司たる至公のみ耳。 「陳給事に与ふる書」(卷二七・1481)

この書簡は陳京に自己の推薦を求めるものであり、多少の誇張の辞も存しようが、この情況は当時の白居易や元稹等中流以下の士大夫達にとつてはいずれも五十歩百歩のものであったと推測される。されば、ともに長安の片隅で肩を寄せ合つて暮らす彼等が、詩文の唱酬によつて互いの友情を深め、その淋しさを埋め合うことは極めて自然な関係であり、時にその街衢に目睹する世上の〈富貴〉に対して不満と羨望の気持ちを抱くことも、あながち有り得無かつたことではないであらう。

唐代に往々に散見される社会風刺の詩篇をかかる読者層の視点でとらえる必要を、小稿は、今後の課題として呈するものである。 (一九九四年八月三十日 在福岡)

注

- (1) 「聞樂天授江州司馬」(『元氏長慶集』卷二十)。ただし本稿では白居易「与微之書」(那波本『白氏文集』卷二七・148)に引用されたものに拠つた。元稹の詩文集では、第三句「驚起坐」を「仍悵望」に、第四句「吹面」を「吹雨」に作る。
- (2) 『歌集 殘燈』石風社 一九九三年八月刊。
- (3) 白居易「与微之書」(『白氏文集』卷二七・148)。なお、本稿では四部叢刊初編所収那波道圓翻朝鮮古活

字本『白氏文集』を底本とし、適宜諸本を参照する。また、同版本は白居易の自注の大部分を削去しているため、これを南宋紹興年間の刊本を影印する『白氏長慶集』（台湾・藝文印書館 一九八一年二月再版）によって補う（本稿では宋本と略称）。また、白居易の作品番号は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（朋友書店 一九七四年七月再版）に拠るものである。

(4) 『元氏長慶集』巻五一。また同作品は『白氏文集』の巻首にも収載。

(5) ただし「新楽府」については、敦煌出土の遺簡中に十六首の抄録（伯<sup>ペキ</sup>3197号）が見られるほか、坎曼爾<sup>カンマンル</sup>という人物が元和十五年（八二〇）に抄録したとの署名の入る残欠（「売炭翁」一首）が発見されている。この「坎曼爾詩箋」は、現在新疆博物館に蔵されているとのことであるが、近年、顧学頔氏の校点する『白居易集』（全四冊 北京・中華書局 一九七九年十月刊）にその写真が紹介された。

(6) 例えば、陳寅恪氏著『元白詩箋証稿』（一九五〇年初版・五五年補訂、本稿は上海古籍出版社一九八二年刷の『陳寅恪文集之六』に拠る）一二八〜一二九頁には、この問題に触れ、すなわち元和四年の以後、数度に互る白居易の改作と増補があり、五十首という大作の完成は、それよりもやや後のことであるとす。また同書は、清・盧文弨の『群書拾補』の「白氏長慶集校正」が明代の敵震の刊刻による『白氏諷諫』に「唐元和壬辰冬長至日左拾遺兼翰林学士白居易序」の一文があることを指摘していることに注目し、自説の補助としている。「元和壬辰」は元和七年（八一二）に当たる。

(7) 羅聯添著『唐代文学論集』（全二冊 台湾学生書局 一九八九年五月刊）下冊四九七〜五二〇頁「白居易秦中吟写作的背景」。また同氏著『白樂天年譜』（台湾・国立編訳館 一九八九年七月刊）一〇三〜一〇四頁。ところで、同様の問題については他に湯華泉氏の論文「《秦中吟》・《新楽府》写作先後弁」（安徽師大書報「哲学社会科学版」一九八二年 第一期「総第四〇期」）を参照した。

(8) 例えば、この詩の第二一・二二句を、佐久節氏訳は「今此家の主人は良媒たちを集めて盛宴を張り、婚を議せんとしてゐる。」（統国訳漢文大成文学部第九巻『白樂天詩集』第一巻 国民文庫刊行会 一九二八年八月刊）、鈴木虎雄氏訳は「こゝに某家の主人あり、仲うどたちを会合して座敷に宴を張り酒を備えて、そ

白居易「秦中吟」の読者層（静永）



の量なみく」と玉の壺にみてり。」(『白楽天詩解』 弘文堂 一九二八年十一月刊)、田中克己氏訳は「この家の主人はよいなこうどたちを集め、宴会をして結婚の相談をしようとしている。」(漢詩大系『白楽天』集英社 一九六四年六月刊)、近藤春雄氏訳は「ところで、この家の主人は、よい仲人を集めて、宴会を開き、酒が玉壺に溢れている。」(『白氏文集と国文学・新楽府・秦中吟の研究』 明治書院 一九九〇年一月刊)と、いずれも媒人を複数に考えておられるようである。ただし、中国の霍松林氏は「主人請来最好的媒人、準備的美酒盛滿了玉壺。」(『白居易詩選訳』 修訂本 天津・百花文藝出版社 一九八六年二月刊)と訳出しておられる。

(9) またこの事は『旧唐書』卷一六四および『新唐書』卷一五二の「李絳伝」にも見え、更に李絳の撰した『李相国論事集』にも「論安国寺不合立聖德碑状」(卷二)が収められている。

(10) 宋・洪邁『容齋五筆』卷七「書麴信陵事」を参照。

(11) 『元氏長慶集』卷九に収められる「傷悼詩」の各篇である。

(12) 『元氏長慶集』卷九「傷悼詩」の内、「初寒夜寄盧子蒙」「城外回謝子蒙見論」「論子蒙」の三首である。

(13) 『元氏長慶集』卷五八「唐左千牛韋珣母段氏墓誌銘」。

(14) 底本は「古琴」に誤る。今、平岡武夫・今井清両氏校定『白氏文集』第一冊(京都大学人文科学研究所一九七一年刊)に従って改める。

(15) 陽城召還の事は、『旧唐書』卷一九二「隱逸伝」および『新唐書』卷一九四「卓行伝」中の各「陽城伝」、また『資治通鑑』唐紀五二、順宗永貞元年(八〇五)の条に見える。

(16) 『旧唐書』卷十四「憲宗紀」によると、元和四年七月、憲宗は「御制前代君臣事迹十四篇」を六扇の屏風に書かしめ、宰相達に見せたという。ただし、この事績を李絳『李相国論事集』において確かめるに、その「御制事迹」は五十條であったものようである(同書卷一「造屏風事」「進歷代君臣事迹五十條状」「批宰相等賀忠諫屏風表」。従来、白居易の「新楽府」が何故五十首であるのかについて、これを論じたものを見ないが、筆者は窃かにこの憲宗の五十條の「御制事迹」に呼応したものと推察する。だとす

れば、この「新樂府五十首」は、白居易が時の皇帝に奉じた作品であることの傍証が得られるであろう。

- (17) この事は『旧唐書』卷二六六および『新唐書』卷一九の「白居易伝」、また『資治通鑑』唐紀五四、憲宗元和五年(八一〇)の条に見える。また、この時、李絳が憲宗に執り成した文章が『李相国論事集』に見える(同書卷一「論白居易事」)。

- (18) また、この「議婚」詩に詠じられているところは、白居易自身の結婚(元和三年)の情況も反映されているように思われる。彼の妻は、既に平岡武夫氏「白居易とその妻」(東方学報第三六冊 京都大学人文科学研究所 一九六四年十月)に説かれているように、当時の名門である弘農の楊氏一族より嫁いでいる。彼女は、白居易とも交流の深い楊虞卿の従父妹であり、楊汝士の妹であった。しかし、結婚当時の楊家がいまださほどの社会的地位になかったことは、花房英樹氏『白居易研究』(世界思想社 一九七一年三月刊)一六～二五頁が指摘しておられるところである。また、彼女の結婚の年齢については、花房氏は同書において「居易よりも少なくとも十五歳ほど若いはずである。」と推定しておられるが、三十七歳で結婚した白居易のことを考えると、彼女の結婚もまた二十歳を過ぎていた可能性が高い。白居易は「内に贈る」と題する詩(卷一・0032)の最後に言っている「君が家に貽訓有り、清白をば子孫に遺す。我も亦た貞苦の士、君と新たに結婚せり。庶くは貧と素とを保ち、偕老して共に欣欣たらん。」と。また「友に贈る五首」其五(0038)にも、「三十にして男は室有り、二十にして女は婦ぐ有るべきも、近代 離乱多く、婚姻に期を過ぐることも多し。」とある。『白氏文集』卷一・二に収められる一二二首の諷諭詩には、今回の「秦中吟」の如く、〈私的人格〉を持つものと、「新樂府」の如く、〈公的人格〉を持つもの(例えば庄卷「賀雨詩」などは後者に属しよう)との二種類の作品群があるように思われる。このことについては後日稿を改めて論じたい。
- (19) その一方、自己の顕揚を目的として創作された作品も、もちろん存在したであろう。例えば、元稹の「和李校書新題樂府十二首」はそうした作品であると考えられる。これについては拙稿「元稹『和李校書新題樂府十二首』の創作意図」(日本中国学会報第四三集 一九九一年十月)を参照されたい。

【追記】筆者は、本稿執筆後、十月七日明海大学で行われた第五回中唐文学会において本稿の要旨を報告する機会を与えられた。その折、「吟」と「楽府」の形態の違いについて、「吟」が比較的軽佻浮薄な詩歌形態であるのに対し（例えば張籍の節婦吟や孟郊の遊子吟など）、「楽府」は漢の武帝の設置した役所の名を由来とし、本来天子との関わりの深い堂々たる正式な詩歌形態であるとのこと指摘を日本大学の丸山茂氏より賜わった。本稿の論証を補充するものとして、ここに記して鳴謝いたします。